



体育祭

2007.10.17 米沢市営陸上競技場にて

学園近況

昭和は遠くならにけり

校長 九里 廣志

『三丁目の夕日』という映画にノスタルジアを感じる同窓生も多いことでしょう。「何も無いけれど、夢と希望のあつた時代!」というキャッチコピーが、現在と対照的です。

ところで、「生徒館」という宿泊教育施設(一九七七年竣工)をご存知の方は多いと思います。新入生の宿泊ホームルームの実際の活動・宿泊場所であり、部活動での合宿の思い出をお持ちの方も多いでしょう。現在その建物は、一部は隣接する「九里幼稚園」の入園前保育の施設として、残りを「男子寮」として活用しています。幼稚園の保育園的必要性の増加や、遠く他地域から進学する生徒も多くなり、また地域の高校生対象の「下宿」も少なくなってきたことなどもあって、このような施設として改築したわけです。現在十三名の生徒が寄宿しています。また新年度も、入寮希望の生徒が入学してきます。

学園の昔の写真を見ると『学生寮』の写真があります。女子生徒の寮で、しかも昭和のまだ早い時期の写真ですから、『三丁目の夕日』の世界のような生活だったのでしょう。現在の男子の雑然とした部屋や物があふれた生活とは、相当違った世界を想像しています。

しみ込んだ精神から 誇りと自信を

同窓会長 佐藤 せつ
(S二十三年卒)

同窓会の皆様には、お健やかに過ごしの事とお慶び申し上げます。

さて、昨今の世相を振り返るに何だか恐ろしいことばかりで、日本が荒んできたように感ずるのは私だけではないと思います。国民の意識・行動に自信と誇りを失っているように思えてなりません。それに引き換えわが母校を訪問するたびに思うことは、電話の対応から始まり、明るい挨拶、親切な案内等々、人間として一番大切な「礼と譲の精神」を日常生活にしっかりと取り入れた教育がしみ込んでいることを感じ、嬉しくなります。

今こそ学問は勿論のこと、各クラブでの活き活きとした高校生活を、そして私立学校として「誇りと自信」を持って頑張つて欲しいと、同窓会の一員として願っています。

今年度も、母校の益々の発展と同窓生の皆様のご活躍とご健勝を心からご祈念申し上げます。

ステージの幕が開いた。はたしてそこに現れたのは……。ドーンと巨大な姿に「オオー」という歓声？

『アメイジング・グレイス』の歌が流れたとき、中島啓江の歌声のすばらしさを実感した。

『ドドーン』は、すでに飛んでしまった。彼女の饒舌なエスコートで、沖縄への歌の船旅は始まった。

沖繩は第二次世界大戦のとき、日本の中で、唯一戦場となり、戦後は長い間、アメリカの占領下におかれた。二重、三重の苦しみと悲しみを体験したが、人々はたくましく生きてきた。中島啓江のなかには、四分の一の沖繩の血が流れているという。そのせいか、彼女の沖繩への思いは深い。その思いは、歌声となって沖繩の青い空と、透

船旅は楽しい ———— 中島啓江コンサート

記念音楽会

9/13 ———— 長谷部恵美子 (S42年卒)



き通った美しい海を連想させてくれた。『花』『涙そうそう』など沖繩の歌への旅は、実に快適であった。

二部のイタリア、アメリカへの船旅は、『オー・ソーレ・ミーオ』で始まった。女性の歌声で聞く『トゥーランドット』も、すばらしかった。イタリアに行ったことではないが、まだ見ぬイタリアの地を想像させてくれた。

『ジョージア・オン・マイ・マインド』では、彼女の全身が、まるで楽器のように思えたほど、リズムカルで楽しかった。途中で、ポロリと涙がこぼれそうになったりもしたが、

船酔いをすることもなく、抜群の歌唱力とリズム感を堪能した二時間であった。

総会報告

多勢さんによる
民話の語り



太鼓の響きに 心踊らされました

6月30日 高木 郁 (S33年卒)

総会は、年度行事等が滞りなく承認されました。引き続き研修会に入り、ゆるゆるの里の語り部多勢久美子さんによる民話口演で、民話の奥の深さを実感いたしました。さらに懇親会では「ふるさと太鼓」の熱気溢れる演奏に心踊らされました。また先生方、会員の方々の歌やトークも楽しいものでした。時間があつという間に過ぎ、別れを惜しみながら終了することが出来ました。



平成十九年度の同窓会総会は「二」および「三」の卒業学年が当番となり企画運営に当たり、年度の初めから数回に渡り準備会を開きました。当日は、退職された懐かしい先生方も多数ご参会頂き、盛大に開催することが出来ました。会場は東京第一ホテルでしたが、準備した会場が狭く感じるほどで、会を進めた者としては大変感激しました。



- 尾形 ひでさん
(旧姓 石黒 S11年卒)
- 尾形 千歳さん
(旧姓 三瀧 S52年卒)
- 尾形 百合恵さん
(2年生)

松明けの一月八日、サラダ館城西店の尾形さんを訪ねました。
米寿をお迎えのお元気なおばあちゃんひでさんは、昭和十年九里裁縫女学校在学中に校舎の火災に遭い、二教室が焼け残り、その教室で学ばれたそうです。他の方は近くの小学校に分散して学ばれたとか。裁縫では雛形を沢山作られたそうです。校舎が新しくなって初めての卒業生で貴重なお話を伺うことが出来ました。
千歳さんは、生徒数が一番多い時の入学で、合唱部でした。部員が六十名もいたそうです。その大所帯の中で活躍、楽しい充実した学生生活を送ったということです。通学は大舟から自

親子三代 九里です

行方キ又ヨ記
(S24年卒)

関東支部 観桜会までの歩み

九里学園同窓会関東支部の歴史の最初は、昭和二年(十三年)の卒業者の有志の親睦会であったと聞いております。初代の支部長は、永井ます先生で、次に占部ゑいさんに引き継がれました。昭和六十年に「同窓会関東支部」として新しく発足し、その第一回の総会は新規卒業生激励会と併合して三百五十名の参加で大盛況でした。実行委員は当番制で引き継がれ、司会者が小国出身の落語家だったりしたこともあります。その後色々な事情により、会を親睦会と改め、毎年四月一日に観桜会をすることになり、現在

に至っております。

毎回、九里茂三学園長先生にご臨席頂いて母校の活動や生徒さんの様子を伺うことができ、其の都度母校への懐かしさと、敬愛の心で一杯になります。また、先輩・後輩それぞれの人生に感動し、有意義な一時です。

母校は、創立百六年をむかえ、確固たる教育信念は揺らぐことがないということでした。二十一世紀こそ、九里学園の

本領を発揮され、まっしぐらに歩んでいってほしいと
思っています。

吉川 宣子
(S三十年卒)



転車で、一時間もかかり、部活でおそい時も怖いとも思わず夢中だったと笑っておられました。その精神力は今につながり、娘さんと漢字検定に挑戦されたりしています。そしていつも明るく強い精神でお店を支えておられます。
百合恵さんは百人一首の競技で他校に出向き技を磨いておられるそうです。静かな中に名手としての闘志を秘めておられ、集中力は母親似なのかも知れません。置賜地区代表として各大会に出ておられるそうです。
ほのぼのとした心でお暇を告げました。外は夕暮れの霽模様でした。

男性の利点を仕事に 生かしたい

職 場 訪 問

米沢市立病院看護師 青柳 侑さん を訪ねて

(H15年卒)

今回は、米沢市立病院・北棟にお勤めの青柳侑さんです。青柳さんは地元の三友堂病院看護専門学校で四十人の女性の中でたった二人の男性の一人として三年間勉学に励まれました。そして見事国家試験に合格され、実習でお世話になった市立病院に勤務になりました。

入った当初はしなくてはならない事ばかりに気をとられ、手際が悪く右往左往したり、ベテラン先輩の前で緊張の余りパニックに陥ってしまふ等、お会いした印象とはかけ離れたほほえましいエピソードをお聞きました。

看護師の仕事は患者さんのお世話はもとより、医師のサポート、





卓 球 部



入院患者の増加により人手不足が深刻ですが、男性である利点を生かし、いろんな科を経験して、どんな患者さん、状況でもあわてず対処できる看護師を目指して、今日も気の抜けない勤務についています。(S五十九年卒 新井千香代 記)

薬の管理と気の抜けない事ばかりです。また新しい技術、個人情報や法律等の勉強をしなくてはならないことも多く、院内で開かれる勉強会には積極的に参加され、知識と技術を磨かれています。また、病棟内のレクリエーション係を引受け、先輩方のアドバイスを参考に四季の行事を計画、患者さんに喜ばれています。

学生時代にはテニス好きが集まって部を創り、各種大会や遠征等に活躍、また図書委員として文才を発揮、忙しい日々を過ごされました。

専門誌で 九里学園を探してみてください

同窓生の皆様、ご無沙汰しております。すでに二十三年も卓球部の指導に当たっております。部の卒業生も一〇〇名以上になりました。皆さんの名簿も整理していませんので、誰が何年度の卒業なのか、私の記憶が怪しくなっています。いつも皆さんを集めた会を開こうと計画するのですが難しいですね。退職前にはなんとか実現したいと思います。

在校生は男女ともインターハイや国体などにも参加しています。未だかつて置賜大会では負けたことはありません。たまに卓球専門誌を買って九里学園の後輩の名前を探してみてくださいね。また、ジュニアチームも活動しています。興味のある方はお子さんをぜひあずけてください。

(卓球部顧問 大滝 勤 記)



九里祭参加 同窓生 作品展

毎年の九里祭に合わせて同窓生の作品を展示しようということで企画されます。今年の展示では常連の方々の他に美大を卒業されて活躍しておられる笹木さんの作品、フラワールンジメント・紅型染め・戸塚刺繍など珍しいものも出展されました。

体験コーナーではサマーヤンのブローチ・糸巻きの飾りスタンドをつくりみんなで楽しみました。

私の高校時代

岸 みず穂 (S六十二年卒)

バスケットのクラスマッチで衝突 脳しんとう

昨夏、昭和六十年年度三年八組十四名が『不惑』記念のクラス会で二十年前ぶりに顔を合わせた。お忙しい中、町田先生にも出席していただき、仕事や子育て、趣味などの多彩な話に花が咲いた。楽しいひとときの中で、「高校時代の思い出」の話題では特に盛り上がった。

九里祭で『女性』というテーマにそって班毎に歴史上の人物の大壁画を描き、体育館に展示したこと。部活動の厳しさに耐えられず、顧問の先生に見つからないように脱走したこと。修学旅行の自主研修の日、集合時間に間に合わず、夜の研修に行けなかったこと。バスケットボールのクラスマッチで衝突し、脳しんとうをおこしたこと。国語の授業で町田先生が涙を流しながら『ほたるの墓』を範読してくださったこと。聞きながら懐かしさで一杯になった。

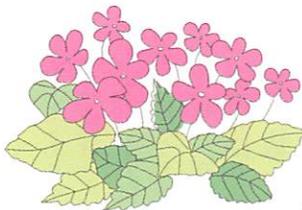
私自身を振り返りかえってみると、高校時代にかけてえのない経験がたくさんさせていただいた。

生徒会長を務めたこと。校長室で校長先生に九里祭のテーマに許可をいただいたこと。県高校総体の開会式で歓迎のあいさつをしたこと。全校朝会で壇上から「礼」と「譲」を唱和したこと。語学研修に参加したこと。ひとつひとつが私の人生の糧になっている。

ひとりひとりのスピーチを聞きながら、素晴らしい仲間と温かく指導して下さった先生方に支えられて、楽しい高校生活が送れたことに感謝の気持ちで一杯になり、早くも次のクラス会が待ち遠しくなった。



(後列左端)



お久しぶりです

皆様



私にも若い頃があったのよ

齋藤佳子先生からのメッセージ

卒業されたのが遥かに遠くになった方も、つい最近の方も、それぞれの立場で人生を重ねられていられることでしょう。私はと申しますと、生徒から「おばあちゃん、何歳になったのや。」というも聞いかけてられています。彼らから見れば、白髪頭で、背の低い私は、この世の人ではなく、遂に昨日は即身仏と言われてしまいました。それでも「私にも若い頃があったのよ。」と心の中で呟きます。

ブロッタ制がスタートした年に勤めた私は、洗いの掃除では素足で床を束子で洗い、その後ワックスでピカピカにしたり、運動会では安来節をハッピー姿で踊ったり、いつも生徒と一緒にしました。洗濯機、冷蔵庫、自動車、電話などがまだ一般化する直前でしたから、自分の体をフルに使って生活するのが当たり前でした。経済的に急成長する兆しが見えた頃で、みんな元一杯で、力を合わせて生きていたように思います。それがIT機器の進歩により、世の中が大きく変わりました。でも明るく優しい生徒の根っこには、いつの世でも変わらない学びたい、鍛えられたいという意欲が満ちていて、老いた私を支えてくれているのです。「若い」ということは素晴らしいといつも実感しています。

一日の仕事が終わって学校を出ると、生徒から「おばあちゃん、転ぶなよ。気をつけて帰れな。」と注意され、「ありがとう。」と感謝しながら帰途につく今日この頃です。

(十二月十五日)



長い間本校の社会科の教諭として、また教頭や事務長の要職も務められ学園のリーダーでありました平賀秋夫先生が、平成十九年の三月をもって退職されました。その先生を八月二十四日、東京第一ホテル米沢にお招きして感謝する会が開かれました。先生が担任なされた四学年の卒業生の方々と演劇部の卒業生、更に旧・現職員の先生方、同窓会の方々一二〇名が集い、歌あり踊りありの賑やかなにも和やかな会になりました。真面目で厳しい、しかし慈愛とユーモア溢れる先生のお人柄、教育哲学をしっかりと持っておられた先生の教えの成果をこの会に見たと思います。自称恥ずかしがりやの先生も、自ら踊りを披露され、いつきに会は盛りあげられました。

(粟林 雄一 記)

米沢の人に「兼続」を

語ってもらいたい

遠藤 英 先生 「直江兼続の素顔」出版

来年のNHK大河ドラマに直江兼続が決まり、米沢人はわかに浮き足立っている。しかし、原作『天地位』どころか、米沢人が書いた書籍においても、米沢時代の直江兼続については殆ど書かれていない。これでは観光客を迎える準備をしても無駄である。それでも来訪する観光客がいるとすれば、それは熱烈な直江ファン、歴史ファンであろう。米沢人は彼らを満足させるほど直江兼続を知らない。確かに史跡はある。だが、単なる史跡めぐりでは、全国的に地域おこしの波が起きている現在では「米沢魅力無し」



のレットルを貼られるかも知れない。そこで、居ても立ってもいられず、米沢における直江兼続に注目した本を書いた。すでにNHKプロデューサーには進呈した。あとは地元の方々に広くお読み頂き、皆様の口で直江兼続を語っていただくことを願うのみである。

英 先生の * 兼続の魅力 *

直江兼続の最大の魅力は、その華々しい実績よりもむしろ、彼の崇高な精神世界にあると思う。「智将」と冠される彼は「学問」と「政治」の両面から高い評価を受けているが、その土台の上にあつて四十歳にして自らの生を見極めた兼続の、人間愛に満ち、我が身を顧みずに奔走する姿は、私の目にはもはや「仏」として映っていた。しかし彼は決して彼岸の「仏」などではなく、常に人々の生きる現場に在って、現実のしげりや重圧に屈しない「かぶき者」であった。その彼が四十歳以降の人生を賭けてつくりあげたこの米沢の町に、いま私が暮らしているということに、私は今回の著作活動を通じて感謝の念を覚えた。そういう意味で直江兼続は、私にとって恩人なのである。

編集後記

直江兼続は運命の地米沢を愛し、米沢の町の基礎を造りました。そのほとんどが現代に生きています。九里学園も同窓生が積み重ねてきた小さな足跡が集合して土台となっていると思います。明日また頑張りましょう。

- 遠藤英先生の「直江兼続の素顔」は、事務室であつかっております。一冊五〇〇円です。どうぞお買いもとめ下さい。
- 今年の記念音楽会は九月十二日(金)です。いつも十三日の創立記念日におこなわれておりましたが、今年は県高校総体の地区大会と重なったため十二日になります。どうか御了承下さい。

- 同窓生の集い(総会)は、六月二十八日(土)です。その運営担当は卒業した年が四と五のつく学年(昭和二十四、二十五、三十四、三十五、四十四、四十五、五十四、五十五、平成四、五、十四、十五、二十)です。詳しくは別紙を参照下さり、申込みいただきますよう御案内いたします。

